

常陸大宮の瑪瑙（火打ち石）

瑪瑙とは

瑪瑙や玉髓は、微細な石英の結晶が集合してできた鉱物です。縞模様をもつ玉髓を一般に瑪瑙と呼びます。地下深くから湧き出た熱水中の二酸化珪素が、地層・岩石の割れ目や空洞に沈殿してできたものです。非常に硬く、色は無色、白色、赤色、緑色、灰色など含まれる成分によって様々です。常陸大宮の瑪瑙は古くから全国的に有名で、ある時期までは「火打ち石（王父石）」や「水戸火打ち」という呼名が一般的だったようです。

常陸大宮の瑪瑙

市内の瑪瑙の産地は、小貝野層（1,700万年以上前）などを起源とする玉川～緒川水系と、男体山火山角礫岩（1,500万年以上前）を起源とする北富田～諸沢系の2地域に分けられ、いずれも断層に沿った脈として見られます（写真1）。赤色の瑪瑙脈は未確認ですが、玉川水系で見られる瑪瑙の礫はほとんどが赤色系です。しかし起源が同じ地層でも、那賀など緒川水系の瑪瑙は無色～白色を示します。一方、北富田～諸沢地域の瑪瑙は、ほとんどが無色～白色です（写真2）。

写真1▶

男体山火山角礫岩中の瑪瑙脈
（写真中央の白色部）



▲写真2：吉井本家製の火打鎌と火打ち石の瑪瑙
左／北富田産（白色系）、右／玉川産（赤色系）

かつて瑪瑙は生活の必需品!?

マッチ以前の火起こしの歴史をたどると、木を擦り合わせる方法から、石と金属を打ち合わせる方法へと変化してきました。そして、火花の発生に適した石（発火石＝火打ち石）として、瑪瑙、石英、チャートなどが利用されました。その中でこの地域は、瑪瑙製火打ち石の重要な産地として、古くから広く知られていました。

千葉県文化財センターの研究などによると、諸沢地域の瑪瑙は、石鏃等の石器として福島県や関東各県の縄文時代の遺跡から出土していて、大昔から貴重な石材として広く流通・活用されていたことも明らかです。さらに玉川の瑪瑙は「常陸国風土記」に“火打ち石に適する”とあることから、奈良時代には、常陸大宮の瑪瑙が発火石として利用されていたことが分かります。そして、江戸東京博物館の研究などから、江戸時代の都内の遺跡から出土する火打ち石のほとんどが、北富田～諸沢地域を主要産地とした瑪瑙であることも判明しています。水戸藩主徳川斉昭は、この地域の瑪瑙を原料にガラスの製造も行いました。

北富田～諸沢地域で産出された瑪瑙は、膨大な産出量を誇り、江戸時代からマッチが普及する時代まで盛んに採掘されて火打鎌とともに販売され、人々の生活に大きく貢献してきました（江戸時代以前の記録については不明）。マッチが普及してからも、戦時中は兵士の携帯火打ち用具に使われ、終戦前後の物資不足時には、一般家庭での需要も高まったそうです。

昭和30年代には、大量の瑪瑙が貨車で昭和電工に出荷されました。山方の神奉地では宝飾品の加工事業も行われ、採掘は昭和50年代まで続けられていました。出荷のための運搬ルートや集荷場所も、市内山方だけではなく、常陸太田市天下野や大子町西金などと交通の発達に伴って変化し、また、一時的な集積所「石倉」も造られたそうです。

今日、火打ち石は厄を払う「切り火」に利用される程度ですが、常陸大宮の瑪瑙は、『火の素』として1300年以上にわたり、人々の生活を支え続けてきました。さらに石材としては、数千年前の縄文時代からという歴史があり、未解明の貴重な歴史的遺産でその価値は多大です。“火打ち石街道”とも言うべき瑪瑙運搬ルートの解明、社会的貢献、採掘の歴史などの調査・研究が急がれます。

※細貝虎雄氏、細貝豊氏、小野瀬善真子氏より情報を得て、(財)自然史化学研究所菊池芳文氏が執筆し、寄稿していただきました。